

潮

教育ノート・八鹿高校問題をめぐって

北川 鬼太郎

全国連合について・補遺

編 集 部

書評「日本無政府共産党」

藤 川 健 郎

書評「黒いパリ」

南 島 二 朗

映画評「宵待草」

世界語・エスペラントについて

江 藤 敏 和

論

教育ノート III

八鹿高校問題をめぐって

北 川 鬼 太 郎

八鹿高校問題は連日、異常とも思える執拗さで赤旗に取りあげられています。この事件はまるで日共の際だから部落解放同盟を徹底的にたたかうとする道具として利用してやれと言うような政治的意図さえ感じられます。

教育界に起きたこの事件は日教組の中の党派指導権の戦い、社共の戦いと同様に、はっきりと図式化できるようになって来た事に、またかと言う感をさえ与えないこともありませんが、そう言って片付けてしまふには、あまりにも重要な問題をかかえて

いると考えられます。

それは同和教育の姿勢であり、それをどの様に推進するかの問題であります。

日教組は被差別部落を解放するために部落解放同盟と提携し同和教育を推進して来たのであり、七十四年度の定期大会に於いて、

融和主義的な『同和』教育のおしつけを排除し、真の部落解放をめざす同和教育を、全組合員、全国民のものにするために、被差別部落の歴史と現状を正しくとらえ、部落差別の実態を明らかにし、部落解放運動を正しく認識する学習会を組織し、自主的、民主的な同和教育を推進し、  
と決定し、この方針にもとづいて運動を、おし進めています。

しかし、この同和教育の取りくみは今なお充分と言う訳ではありませんし、社会的にも部落問題は狭山差別裁判などを通じて一般に理解されている程度ではないかと思えます。そのみならず人々の中にある差別意識、差別の根は深く、大きな社会問題としなければならぬ種々な問題をかかえています。

現在までの部落解放運動の努力にもかかわらず、アイヌ人、身障者、男女間の差別同様、人間として法的にも社会生活に於いても当然、平等であるべき関係性が今だに確立していないと言ふことに注意しなければなりません。

歴史的に見ても階級制社会の存続に利用されて来た封建的身分制に差別と言ふ意識を捨てられるような完全な平等教育、及び階級の無い社会を建設しなければ、日々あらたなる差別が形成されて行くことではありません。

八鹿高校事件は、暴力的なトラブルへと発展せしめた要因を追求し、それを明らかにしなければ、その真相を把握する事は出来ないのであります。

ところが赤旗のごときは暴力そのものを取りあげて部落解放同盟を「暴力集団朝田丸尾一派」とか、日共系の組合（都教組を含む）団体で作った「解同」朝田一派のいっさいの暴力から、国民のいのちと人権、教育と自治をまもる中央連絡会議の発行の共同新聞には「反民主的利権集団」とか以上の様な言葉を用いて誹謗中傷にあけくれているのであります。

彼らのねらいはあまりにも明白であります。部落解放同盟が恐しい暴力集団であると言ふ事を広く大衆の印象に残らせて孤立させ、「部落解放同盟正常化全国連絡会議」に同盟の組織の力を握らすことがまず第一義の目的なのであるとしか考えられません。

「八鹿高校問題についての日教組の見解」(七四年十二月十八日)によりますと

今回発生した八鹿高校問題の発端は、教師集団が、被差別部落の生徒たちの教育要求に対する話し合いをかたく拒否しつづけたことにある。

とありますように、研究会設置の教育要求によってこの事件は端を発した訳であります。

八鹿高校に従来よりあった部落問題研究会(文献学習が中心で、部落解放だけの解放ではないという立場に立ち一般差別的解消のなかに部落差別的解消を位置づける)に対して被差別部落出身の生徒を中心とした生徒達が批判と不満を持ち新たに部落解放研究部の設置を申し入れたのであります。しかしこの様な要求に対して職員会議では認めない事に決定をします。その理由は次の通りであります。すでに部落研がある

こと、解放研の他校のやり方は確認糾弾のみで科学的学習が出来てないこと、青年行動隊を中核とする外部とつながった運動体であり教師の指導が及ばない事、などの理由であります。

この様な理由で拒否する姿勢には全く政治主義的配慮しかみられませんし、話し合いを求める解放研の生徒に対してのその後の教師側の対応には多くの問題が含まれている様に考えられます。解放研の生徒がハングーストライキに十一月二十二日(二十三、四日連休)にはいったのですがそれに対して何らの対応策も講じないで午前中の授業を中止して一斉に教師は集団下校してしまします。この時、同盟と教師集団の衝突、トラブルが起きる訳であります。

暴力事件そのものに対して軽々しく口にする気にはなれませんが、それに至った経緯の中に教師としてこの様な事良かったのかと言ふ感を禁じえませんし、その後の政治的な取り扱い方(党派のプロパガンダに利用されている)に対しては心より怒りを覚えずにはいられません。

## 全国連合について・補遺

### 編 集 部

全国連合が提起されていることに關して

幾つかの文章が発表されているが、前号に

統いてその一部を紹介することとしたい。

というのは、全国組織の形成それ自体もさ

ることながら、そうした提起をふまえて各

グループないし個人が自己の運動を組織に

ついての検証をし、連合の可能性と主体的

な運動の展開について考察を加えることが

現在の混迷した状況を切開する何らかの契

機となりうるかも知れないからだし、ひい

ては自由連合的組織とその運動の形成につ

いての新しい問題を見出し、解決するか

も知れないからである。

なおここに紹介する文章は、引用者の責

任において抄出（ないし一部改変）したも

のであることをおことわりしておく。

### I 日本無政府主義者連盟規約草案

及び綱領草案によせて

石川玄造

任意の合目的集合としての集団を律す

る規約は、その組織的性格を明らかにする。

もし規約自体が行動を統制する条項によつ

て構成されているならば、外部に対して入

堅いV組織となり、内部に対して規律主義

的傾向を示すだろう。だからそれは組織内

の各人の思想、したがって行動の自由を抑

圧し、組織批判を前もってつみとつてしま

う。また綱領にその合目的集団にあるイ

デオロギーの性格を与えるとするれば、綱領

自体に呪縛された行動の奇型を完全に排除

することはできない。

綱領はある情況における唯一の絶対的な

正しさが前提とされる。そのため綱領の作

成には膨大なエネルギーが費される。しか

し、できあがった綱領は殆ど不可避免的に批

判にさらされ、正しさは相対性の中に陥ち  
こむ。

つまり、わたしはV綱領の作成や承認  
は百害あって一利なしと思いたい。

ともあれ、綱領草案の末尾に、それが組  
織の最終的な正当性を支持するものでなく、

暫定的な指標にすぎないと自己規定してい  
る以上、組織構造について深く論ずる必要

はあるまい。（以下、石川氏の文章は、こ  
の綱領草案の無内容さを手厳しく批判し、  
次の文章へと続いている。）

わたしは、諸兄がこれまで闘ってきた成  
果を日本無政府主義者連盟として組織的に

結実させようとするのなら、その活動の総  
括を現的に完了させ、当面のスローガン

を全国的に提起して行くことの方が重要で  
着実な道程であろうと忠告したい。そして

もし、綱領を奉じたいのなら、行動綱領と  
して指定することの方が諸兄にとって先決

問題だろうと思うものだ。わたしは、敵権  
力の実存を規定する理念と、その延命・発

展のための個別日帝の総路線に対抗しうる  
テーゼの欠落した綱領、ロシア・マルクス

主義者の戦略・組織論に明示的に対抗する  
それらの欠落した綱領が、日本の無政府主

義者―アナキストを結集させる軸には決してなりえない、と信ずるのだ。

## II 存在に根ざした連合を

星 金次

我々は、今生きていく中で、かつ人生のそのものの全面的な具現化としてある革命にあわせて運動をし、またして行こうとしている中で、我々自身が内にかかえている問題は、単にスローガンのテーマを定め、無原則的に多くのアナキストを集めたからといって、解決を与えられる類のものではないと思われる。つまり、一人一人がその存在に負っている問題を「一人では何もできないが大勢集まれば何かできるだろう」といった短絡的な、あつてないようなものに転化させてしまう恐れがあるから、各地方の運動を重視し、その連帯をこそ、全国的なものよりもこだわって行きたい。

私は、自由連合を、はじめからあるものとして受け入れるつもりは全然なく、これも我々の手の届くところから一つ一つ自分のものとしていかねばならないのではないのでしょうか。その意味で、何かのきっかけで交流をもった各地域の同志が、あるところ

の呼びかけで連帯集会をもち、さらにそれを肉付けしていくという形が、自由連合をはっきりと存在化しえるのではないでしょうか。

私の手元には、もう一通のピラがあるが、これは星氏の提起している地方の連帯集会の呼びかけ（会津・宇都宮・長野）であり、紙枚の關係と重複を避ける意味で割愛させてもらいたい。この小文の中で抄出紹介と同時に一定のコメントも付けたいと思うので悪しからず諒承されたい。

紹介した二文とも全国連合の現在の提起に批判的であるのは偶然だが、ここに現在のアナキズムの状況が如実に出ていていると思う。星氏の文章をもう一步つこめば、主体の力量と運動の質によって組織の質を決定せねばならないことだと思いが、それを見落して「綱領提起」を行ったことにより石川氏の批判を招いている、というのが実情ではないのだろうか。

石川氏の批判は、特に結論部分には賛同するものの提起された綱領に則するあまり、まずもって組織が運動の質と運動主体の力量によってその質を規定されることの重要

性を指摘するのを忘れていたようで、星氏の文章がそれを補足している感がする。実践的な運動の展開の中では、組織の質と運動の質は相互規定的なものとなるわけだが、その質が運動主体の力量によって保障されているのは言をまたない。星氏が指摘するような「一人ではできないが大勢なら」あるいは単独グループではできないが全国連合ならという発想は、達成目標と実践過程の倒立であり、自主的・自立的運動の形成を阻害するかも知れぬ代行主義の裏がえしにすぎない。石川氏のいうように、全国的な共同行動・共同闘争の提起とその実践の積み重ねからこそ、真の全国連合が形成されるのではあるまいか。形骸のみの全国連合を生み出さぬためには、いま最も必要な課題は、各地域での着実な交流と、それに見合う情報の交換であり、そしてそれらを保証し、拡大していくための日常の闘争の実践とその着実な報告、総括、相互批判などではあるまいか。

× × ×

『日本無政府共産党』

(相沢尚夫)

藤川健郎

「日本無政府共産党」という「党」のことに ついて、やっと最近は「ものめずらしさ」がなくなってきたのだが、こうして一書にまとまって見ると、やはりそれは相当に奇妙なものではなかったのかと思えてくるのはどうしたことだろうか。もちろん、そうした「奇妙さ」ゆえに、本書はわれわれにとって必見の書である意義を持つのであるのだけれども。

奇妙さというのはいまでもなく「無政府」と「党」を結合しようとした試みについて言っているものであり、この党が、一九三五年十一月、警察によって千数百名に及ぶともいわれる一斉検挙を受けて壊滅した際のセンセーショナルな「無政府共産党事件」報道に見られる事件としての奇妙さについて言っているのではない。

「日本無政府共産党」は、一九三三年（

昭和八年）十二月に「日本無政府共産主義者連盟」として発足し、翌三四年一月党に改称、前述した一九三五年十一月の壊滅に至るまでのわずか二年間存在したにすぎない活動期間の短い「党」である。にもかかわらず、この党の理論と組織形成の実践は、今日のわれわれをも刺し貫く問題を提起したまま、正当な評価も批判もつけずに、その独自性と現在性についての検証が四十年間も怠られてきたのである。

大沢正道によれば、「戦後まもなく結成された日本アナキスト連盟は、戦前のアナキストの大同団結だといわれるけれども、実際はかならずしもそうでなく、ある種の落丁があったようだ」（「無政府共産党のバトス」海燕通信第4号）といわれているが、その落丁の部分にこそ、われわれが今日的問題として検討すべきアナキズムの権

力論・組織論を展望していたこの党が存在していたのであり、そうした欠落の検証をぬきにしていたことを含めて、「日本無政府共産党」の存在とその影響（むしろ影響のなさとも言うべきか）を、「奇妙」であると感ずるのだ。この影響のなさについては、本書に適切な解説を記している蓮台寺晋自身がかつて苛だたしげにこう書いていたことに同意せざるを得ない。「アナキズム運動史において、無政府共産党が忘れ去られていたのはなぜだろうか。もちろん、単に史料的な問題ではない。運動史研究が過去を対象とし、一義的にその対象たる過去の運動の史的展開に規定されることはいうまでもないが、同時に、研究者の主體的立場によって大きく規定されるのである。大ざっぱにいえば、運動の現在の発展段階に規定されるのだ」（「地下組織との出会い」乱7号、傍点引用者）。つまり、われわれの側がこの党とめぐり合うだけの主体を形成していなかった、ということの奇妙さでもあるわけだ。

とはいえ、△党▽ないし△党派▽から離脱することによってのみ、自己の運動を創出しえていた時期を経験していたわれわれ

にとつては、権力論と組織論を必然的にその内に孕む過渡期の問題について考察することは、その運動の低迷を打破し進展させるために欠かせないことでもあったわけ、本書はそうした意味からも、時機を得た出版物であるといえるだろう。

われわれが本書から読みとるべきことは、「事件」として扱われた党の運動のあれやこれやのできごとではなく、そうした運動と組織をもたらし了当時の現状認識と理論のかかわりにある。そしてそれは、過渡期の問題として、現在のわれわれに検証をせまるものでもあるのだ。

この党の独自性は、アナキストの組織であるにもかかわらず状況に限定されて中央集権制をとったという点ではなく、権力の問題を権力の奪取から国家の廃絶までを含めた過程のうちに考察しているという点にある。II部として収録されている「党テーゼ」と「プロレタリアの戦略戦術」において展開されている理論は、アナキストが国家権力をどのように解体させるのかのプログラムの具体的な提示であり、残念ながら、現代のアナキズムはこのレベルこの展

望すら持ちえているとは思えない。もちろん、党II前衛による運動組織の形成が、レニンの党組織論の一面的なひきょうつしに終始し、その機能的な側面が是認・強調されているのみで、党II前衛の獲得した権力がどのように大衆的に解体されるかのプロセスに説得力を欠いていることや、主要な闘争対象を金融資本に定めて天皇制への評価・解析が十分になされていないこと、等々の時代性に制約された欠陥があるとはいえ、「党テーゼ」はアナキズムの理論的啓蒙書として、「戦略戦術」は現状分析と活動方針として、一部の字句さえ修正すれば今日でも十分に通用しうるレベルにある。

この党の葛藤は、またわれわれの矛盾でもある。党II前衛によるヘゲモニー（権力と呼んでもよい）の獲得と、その獲得に至る過程および獲得以後の過程において、党II前衛と大衆との関係をどのようにに処理し、獲得したヘゲモニーをどのようにに大衆に移行してアナキーを実現するか、党組織を定置することと自由連合的組織の存在を同時許容することによって生じる矛盾をどう解決して行くのかなどは、過渡期について

の、あるいはまた前衛的機能についての考察の中で、われわれの問題でもあるのだ。われわれにとつても、組織的な運動の中の前衛的な存在を否定しすることはできないのだし（たとえ大衆が運動の中で固定的な前衛II党を越えて新しい前衛になるとしても、ヘゲモニーをどういう組織が握るかという問題は残るだろう）、それがアナキーの実現へ向けてどのようにに解体され、分権化されて行くか、自治管理II大衆の自己権力の回復と国家権力の解体を併行させるプログラムをどう組むのか、アナキーを志向する組織自体をどのようにに形成し結合させて行くのか、等々問題は多い。そうした諸課題を担ったまま アナキズム運動の大杉死後の分裂と低迷の中で、帝國主義戦争期における苛酷な弾圧という特殊状況下で、先駆的な実践主体となったこの党は、ほとんど運動らしい運動を展開できずに壊滅したのであるが、その提起した問題は、これまで触れてこなかった武装の問題をも含めて、四十年を経た今日も、深く重いものとしてわれわれを把えているといえよう。

なお本書は、党書記長であった相沢尚夫の「日本無政府共産党」(雑誌『構造』に七十年に連載されたものに加筆訂正したものと、思うが未確認)と党委員長であった植村諦(真木泉の「黒旗は破れた」(アナキスト連盟機関紙『自由連合』一一五—一九号連載)の二つの回想からなるI部と、先述した党理論(相沢の校訂を経ている)を収録したII部および蓮台寺の解説で構成されている。また本書に關係する資料とし

書評

『黒いパリ』(江口

幹)

南島 一一 朗

この文章を、著者自身が「あとがき」で語っているようにたんなる(外国紀行文)の一つとして読むことのできる人はそうざらにはいないだろうし、そうした意味では著者が望んだとおり、この文章は「巷に氾濫する外国紀行文の中で、いくらか独自の位置をもち得るもの」になっている、といえなくもなからう。

ては、最近では相沢の講演を収録した『イオム』7号があり、その他に秋山清「無政府共産党事件」(『思想の科学』44号、一九六五)、森長英三郎「無政府共産党事件」(『法学セミナー』一九七〇年一—二月号)小松隆二「日本アナキズム運動史」(青木新書、一九七二)、秋山清「佇む心やさしき反逆」(海燕書房、一九七三)、及び先述の『乱』の蓮台寺の文章などがある。

(海燕書房刊 一五〇〇円)

この著者の文章を、しかも「紀行文」として自己規定するからには文学的ジャンルに入るであろう文章を書評しないしは紹介するのは、かなり骨を折る仕事になる。別に(文学的ジャンルに属する)というジャンルわけにこだわっているのではなく(何にせよ分類やレッテル貼りなどは本質を把握するものではありえない二義的なもの)と思

っているのだが)紀行文として書かれたものを「政治的」にしか読みとろうとしない愚かしさと性急さが、何か本質的な読みちがえの原因になるのではないかという危惧があることが第一、著者の文章のリズムが評者の息づかいとはかなり異なるものであることが第二、そして随所に重要な問題提起を秘めているこの文章を、単なる紀行文への印象批評にとどめることはできないし、かといって、その問題提起をすべて受けとめることは短い紙枚ではとても不可能だし、もし可能だとしても(もっとも、それを可能にするにはこの「黒いパリ」一巻のポリウムか、それ以上を要するだろうし、評者の能力でできることではない)それはかえって「紀行文」としてのこの本の生命を殺すことになるのではないかという惧れがあることが、骨折りの予兆をもたらしているのである。

著者の文章が必ずしも平明簡易でないことは、評者の周辺では定評のあるところだと思ふのだが、それは決して難解で不明解だということではなく、著者の文章のリズム(すなわち思考のリズムだと思ふ)が、読者にはやや合わせがたいリズムから成立

しているということによるのだろう。これは、生理的な息の長さと同時に思考の上での息の長さとも関係のあることは文章心理学によらずとも明らかなことのだが、評者を含めて比較的若い読者が、一面的にしか見えないものの歴史と背景までをも見ぬき、その息づきを表現しようとする著者の思考と発想が、そのまま文章にあらわれているのであろう。

そうした著者にとって、この文章はその特性を十分に發揮できた素材を取り扱ったものといえるのではないだろうか。

本書は、一九七一年五月から八月にかけてパリに滞在した著者の、体験をもととした事実の記録であるというが、パリ警察による著者の突然の検束拘置にはじまり、元フランス大統領候補である共産主義者同盟政治局員の逮捕収監された牢獄の描写で終るこの文章は、小説的な興趣で読することのできる文学的結構のととのった文章でもある。(もちろん、純粹の小説作品として評価するには作品の構成や文章表現が再び問題になるであろうが。)

評者にとっての興味を中心は、パリない

しフランス及びヨーロッパにおけるアナキズムあるいは新左翼運動の紹介の部分であって、残念ながらパリの公園や郊外の風景、フランスのアナキストたちの日常生活や、パリ周辺地区の労働者たちの食卓といったものについての興味は二義的なものでしかなかった。もちろん、これらの描写がなければ、この文章の文学的な興味はなくなるだろうし、食事についてのあれこれの思い入れがなければ、著者の日常生活も想起できないものとなるだろう。またスペインからの亡命アナキストやダニエル・ゲランの生活についてのエピソードがなければ、アナキストやアナキズムについての興味が半減し、単に現代フランス・アナキズム紹介の文章として無味乾燥のものとなったであらう。

にもかかわらず、というか、そうした数々の日常性の描写によって彩どられているからこそ、というべきか、抽象的な理論としてだけではなく、実践されているもの、生きて動いているものとして紹介されているフランスのアナキズムの現状は、本書の中で最も興味深い部分である。

肝心のところで紙枚が尽きかけているの

で簡単に書くが(アナキズムの革命組織について、特に運動と組織の関係について興味のある諸君には、是非本文を読まれることを推奨する)、あの「五月革命」が終りではなくすべてのことの始まりであったことを実証するように、この文章で紹介されている運動はそれぞれ「五月」以後へ向けて着実な歩みを始めていることが読みとれることはもちろん、それらが今日的にかかえている問題が、日本でわれわれが課題としていることと相似していることが評者の興味の源泉である。アナキストの革命組織のあり方を探求するいくつかのグループと、革命組織を否定し自治管理を志向するグループ、あるいは情況主義者たちの理論と活動の紹介も、党派の左翼との連帯における方法とその評価のちがいにしても、現在のわれわれに有益な示唆となるものが随所にちりばめられているのだから。それにしても文章の最後部を、性解放の実践者として著者をとまどわせたダニエル・ゲランのしたたかな左翼への現役復帰ぶりで飾っているのは、著者のゲランへの敬意であろうか。

(筑摩書房刊 九五〇円)